

武蔵野日曜集会

罪とは何か

――ロマ書第2章17節～3章20節――

1978年3月12日(武蔵野)

小池辰雄

神の指図 道德法則 聖別の儀式 本性のまま それが本ものであるかどうかだけ 隠なるユ
 ダヤ人 霊による心の割礼 十字架と聖霊 神の誠実 キリストの無者 無者 聖霊における
 一如の世界 神の前にぶつつぶれる 自愛は最大の罪 本願の愛

【ロマ2・17～29】

17 汝ユダヤ人と称えられ、律法に安んじ、神を誇り、¹⁸その御意を知り律法に教えられて善悪を弁え、¹⁹また律法のうちに知識と真理との式を有てりとして盲人の手引、暗黒におる者の光明、²⁰愚かなる者の守役、幼児の教師なりと自ら信ずる者よ、²¹何ゆえ人を教えて己を教えぬか、竊む勿れと宣べて自ら竊むか、²²姦淫する勿れと言いて姦淫するか、偶像を惡みて宮の物を奪うか、²³律法に誇りて律法を破り神を軽んずるか。²⁴録して『神の名は汝らの故によりて異邦人の中に瀆さる』とあるが如し。²⁵なんじ律法を守らば割礼は益あり、律法を破らば汝の割礼は無割礼となるなり。²⁶割礼なき者も律法の義を守らば、その無割礼は割礼とせらるるにあらずや。²⁷本性のまま割礼なくして律法を全うする者は、儀文と割礼とありてなお律法をやぶる汝を審かん。²⁸それ表面のユダヤ人はユダヤ人たるにあらず、肉に在る表面の割礼は割礼たるにあらず、²⁹隠なるユダヤ人はユダヤ人なり、儀文によらず、霊による心の割礼は割礼なり、その誉は人よりにあらず神より来るなり。

【ロマ3・1～20】

1 然らばユダヤ人に何の優るる所ありや、また割礼に何の益ありや。²凡ての事に益おとし、先ず第一に彼らは神の言を委ねられたり。³されど如何ん、ここに信ぜざる者ありとも、その不信は神の真実を廃つべきか。⁴決して然らず、人をみな虚偽者とすとも神を誠実とすべし。録して『なんじは其の言にて義とせられ審かるるとき勝ちを得給わん為なり』とあるが如し。⁵然れど若し我らの不義は神の義を顕すとせば何と言わんか、怒を加えたもう神は不義なるか(こは人の言うごとく言うなり)。⁶決して然らず、若し然あらば



如何にして世を審き給うべき。7わが虚偽によりて神の誠実いよいよ顕れ、その栄光とならんには、争で我な**お罪人**として審かるる事あらん。8また『善を来らせん為に悪をなすは可からずや』(或者われらを**譏りて**之を我らの言なりという)斯る人の罪に定めらるるは正し。

9さらば如何ん、我らの勝る所ありや、有ることなし。我ら既にユダヤ人もギリシヤ人もみな罪の下に在りと告げたり。10録して『義人なし、一人だになし、11聴き者なく、神を求むる者なし。12みな迷いて相共に空しくなれり、善をなす者なし、一人だになし。13彼らの咽は開きたる墓なり、舌には詭計あり、口唇のうちに**は蝮の毒**あり、14その口は**詛と苦**とに満つ。15その足は血を流すに速し、16破壊と艱難とその道にあり、17彼ら平和の道を知らず。18その眼前に神をおそるる畏なし』とあるが如し。

19それ律法の言うところは律法の下にある者に語ると我らは知る、これは凡ての口ふさがり、神の審判に全世界の服せん為なり。20律法の行為によりては、一人だに神のまえに義とせられず、律法によりて罪は知らるるなり。

●神の指図

パウロはユダヤ人に語っているのです、あまり我々にぴんとこないような言葉があるわけです。そんなのはあつさり済ませていきます。

17汝ユダヤ人と称えられ、**律法に安んじ、神を誇り、**

ユダヤ人の律法の誇りというものを本当に今でもユダヤ人は持っている。「律法の民」という。これは我々の想像もつかないようなところがあるわけです。それだけ頑固なところがある。その一番頑固な人間はパウロだった。その一番頑固なチャンピオンがひっくり返ったんですから、ユダヤ人は、「あれがひっくり返っているんだから」と言つて、考え直さなくてはいかん。考え直しができないところに、いかにユダヤ人が律法の民だということが分かるわけです。

「律法に安んじ」というのは、「自分たちは神さまからいただいたモーゼの律法を中心とした律法があるから」と言つて、非常に律法に誇っていること。本当の意味において安んじているわけではない。あぐらをかいてしまっているようなもの。「律法に誇っている」と言つてもいいくらいです。律法を誇り、神を誇っている。「我々の神さまはこういう神さまだ。律法をくださった神さまだ」と言つて、神を誇っているわけです。正に間違つた選民意識、エリート意識なんだ。律法の選民としてのエリート意識をもっている。「律法」は、即ち神の御意を文字で表したものが律法ですから。

18その御意を知り律法に教えられて**善悪を弁え、**

律法をもう少し広い意味で言いますと、神の言葉――まあ、「言葉」と言うあまり広くな



つてしましますから困りますけれども――要するに成文律だね、非文律でなくて。「律法」「トーラー」という字は、もともと動詞では「指図する^{さしず}」という意味をもっている。「こうしろ、ああしろ」と指図する。だから、神の「指図」ということなんです。

19 また律法のうちに知識と真理との式^{かた}を有^もてりとして

「知識と真理との式」とは法則、規準ということ。尺度になっているわけだ。

盲人の手引、

「盲人」とは異邦人のことを言うわけです。律法を知らないから、どうやっていいかわからない。律法を知らない民の手引きということ。

暗黒におる者の光明、

「暗黒におる者」、これも同じこと。その光、

20 愚かなる者の守役、

「愚かなる者」、これも異邦人。みんな異邦人を別な言い方をしている。

幼児の教師なりと自ら信する者よ、

「幼児」も異邦人のこと。要するに、「律法を知らない者は盲人であり、暗黒におる者であり、愚かなる者であり、幼児である」というわけです。幼児の教師であると自ら認ずる者よ、

21 何ゆえ人を教えて己を教えぬか、

本当の意味で律法を自覚してないではないか。律法を誇って、あぐらをかいてしまっているではないかと。

竊む^{ぬす}勿れ^なと宣^のべて自ら竊む^{ぬす}か、^に22 姦淫する^な勿れ^なと言^いて姦淫する^なか、偶像を悪みて宮の物を奪う^にか、

偶像崇拜を憎んでいるが、しかしながら、宮の物を、偶像の供物を盗んでいると。

23 律法に誇りて律法を破り神を軽んずるか。

律法を誇りて律法を軽んじ、神を誇りて神を軽んずるかということ。23節は正にユダヤ人の心の在り方をずばり言っているわけです。

24 録^{しる}して『神の名は汝らの故によりて異邦人の中に瀆^{けが}さる』とあるが如し。

これはイザヤ書52章5節の言葉です。選ばれたことに対する責任がある。その責任、自覚が全然ない、というわけですね。

●道徳法則

「盗むなかれと言つて、盗みをした」とある。この前、私は「二種の律法」ということを言いました。ユダヤ人は律法をもらった。けれども、異邦人は律法はないけれども、生れながらにしてそういうものを持っているものがある。2章14節、

「14 律法を有^もたぬ異邦人、もし本性^{うまれつき}のまま律法に載^のせたる所をおこなう時は、律法を有^もたずとも自ら己^{みづか}が律法たるなり。」(ロマ2・14)



とある。自分でちゃんと自ら律する。自律している。自分でもって律法を持っている。自ら律法をもって自らを律する。

カントの道徳哲学がそれである。人間は先験的（アプリオリ）に、経験以前に、誰に何も言われなくても、盗むということは悪いということは、人間が経験以前に持っている。生まれつき人間が賜っているところの道徳法則。その道徳法則に対する畏敬の念をもってこれに従う。それが本当の人格的構造であるという。「先生に叱られるから、褒められるから、するのしないの」なんていうのは本当の道徳でも何でもない。自らが立法者です。自ら法を立て、自らその法に従う。法に対する畏敬の念をもってこれに従う。それが本当の自由である。何ものにも依存しないんですから、道徳的な自由というのはそういうことです。道徳的に自由というのは、何ものによっても拘束されることなしに、自らその法に対する畏敬の念をもってこれに従うときに、自由である。だから、法に即すること、即法が自由なんです。いわゆる社会の法律なんていうのはまだ次元が低い。

奥田君あたりはひとつ法哲学をやってもらいたいな。宗教と哲学と法律の本当の構造というものを、奥田君のお弟子さんもここにおられるが、大いにやってくださいよ。もうどうしても、それではダメです。いわゆる法の解釈の仕方がどうのこうのと、ひねくり回して、やれ裁判だなんてやっているけれども。本当の判決は神さましかできない。その神の判決に従うにはどうしたら本当であるかということは、深い法哲学をもたなければダメだと思う。

人間が生まれつき持っている道徳法則に無条件に畏敬の念をもって従うときに、本当にその人は自律、自由な人である。残念ながら人間はこれができない。そこに今日の問題の「罪」があるんです。

「誰ができなくても、そういうことであるべきである」

というのがカントの道徳哲学の厳かな宣言であります。それはこの聖書から来ている。今日読むところに出てくるから。それができたのが晩年のお釈迦さんとキリストです。キリストは初めつから。キリストも心の中では迷ったり、いろいろなさったでしょう。けれども、いつも祈りの世界でそれに打ち勝っていかれたから、彼は罪はない。人間としての弱さは彼も持っていた。そういう心理的な状態をキリストはよく分かっていますから、女に、

「われも汝を罪せじ」（ヨハネ8・11）

と言った。審くやつはその審きで逆に審かれるぞと。ところが、ユダヤ人はその律法に誇ってしまっている。律法に対する畏敬の念ならいい。律法を誇ったらダメなんだ。傲慢な霊はダメです。傲慢な霊は罪なんです。パウロさんはそのことを自分で体験して知っている。彼は非常に傲慢で、

「律法の義につきては責むべきことなし」

なんて、誇った。誇ることができると思っていた。けれども、キリストを知ってから、



「これを塵芥ちりあくたの如く思う」

と。パウロは自分の体験からこういうことをユダヤ人に言っている。「お前たち、ユダヤ人よ。私もその一人だったがねえ」と言うわけです。

モーセの十誡を誰もこれに及第することができない。いわんや、キリストの山上の垂訓は誰も及第することはできない。十誡のもう一つ深い世界がこの山上の大告白です。

「兄弟を憎む者はすでに殺したるなり」

という。「あの野郎！」なんて思ったら、それはいかん。

●聖別の儀式

²⁵なんじ律法を守らば割礼かつれいは益あり、

「割礼」というのは男性に限ったことで、女性はまだ問題にしないわけだ。宗教的な一つの儀式で、ちょうどクリスチャンの洗礼みたいなものです。陽皮の前の皮を切るという、妙なことをする。律法を守れば、割礼をしたってその割礼は結構なことだ。無効ではない。

律法を破らば汝の割礼は無割礼となるなり。

割礼を受けるということは、「聖別される」ということなんです。「神の民とされる」という徴です。そんなものは本当はおかしな話です。問題は律法を守っているか、守っていないかであつて、守らなければ神の民でないし、守っていれば神の民である。割礼という一つの儀式でもって聖別されようがされまいが、そんなことは問題ではない。要するに、割礼を問題にしないということのパウロが言っている。割礼なんて問題ではない。ユダヤ人にとって宗教的な一つの聖別の儀式として割礼というのがあるわけだ。

クリスチャンでは「洗礼」というのがある。教会で牧師さんが悔改めの水の洗礼をやる。それによってキリスト者になったことの徴にするわけだ。

「洗礼なんか受けたって受けなくたって、そんなものは問題ではない、信仰だけが大事だ」

というのが、内村鑑三先生の無教会主義というものです。「ただ信仰のみ」と言う。それはパウロの告白、考えをそのまま内村先生は持ってきたわけです。

「一般に教会が形式的な洗礼でもって、クリスチャンになったのならないのと、くだらないことを言っている。そんなものは問題ではない。洗礼も聖餐も問題ではない」

と。ルターは洗礼・聖餐は認めている。

「これはわが血なり、わが肉なり」

と言って、葡萄酒をなめさせたり、パンを裂いて食べさせたり、そういう聖餐式というのがある。私はドイツのルター教会で見てきた。



「洗礼の聖餐のと、そんなものは問題ではない」

と言って、マルチン・ルターがとにかく一応認めていたこの二つも問題にしない。ルターの根本思想は、こんなものは本当はあまり問題ではない。けれども、一応、キリスト教の伝統として、洗礼・聖餐はルターは認めた。カトリックの七つのサクラメントのうちの五つを要らないとして、宗教改革でこの二つだけを残した。それをもっと徹底的にすれば、こんなものも要らないというのが内村先生の無教会主義というものです。

その方向はもちろん正しい。ただ問題は、こういうものが要らないだけではダメなんだ。もう一つ要るものがあつた。それは聖霊のことだ。聖霊のバプテスマのことを内村先生がもっとハッキリやつてくださればよかったんだけれども。そこを手島君と私が、

「聖霊のバプテスマでなくてはダメだ」

と、無教会から出たわけです。ただ形式がないだけがいいのではない。形式は、もう少し極端に言うと、あつたつて構わない。問題は、

「本ものが来ているか」

ということだけです。

「十字架が本ものになっているか、聖霊が本ものになっているか」

と。それだけです。人間の側のことはみんな相対的なものですから。礼拝の形式だとか、何とかかんとか、いろいろあるよ。みんないいんだよ、それぞれの在り方で。相対的なものをいいの悪いのと言つたつて始まらない。問題は、

「絶対的なものが来ているか」

ということだけが問題なんだ。そうすれば、相対的なことはどっちでもいい。洗礼をやるうが、聖餐をやるうが、構わない。本当の意味で洗礼が生きてくるし、聖餐も生きてくるでしょう。

パウロの言つてるのは、

「本当に律法を守っていれば、割礼も生きてくるでしょう。けれども、それ自身が

問題ではない」

というわけです。ところが、全然、逆なんだ。割礼があればいいと思つている。それほとんどもない、というのが今パウロが言おうとしてることなんだ。

パウロのユダヤ人に対することは、いわゆる今までの一般の、従来の教会の在り方に対してのと同じようなわけだから、内村先生はそういうようにした。確かに、無教会——「主義」という言葉は私は嫌いだけれども——無教会的な信仰の方向はよかった。ところが、方向はよかったけれども、

「十字架のこつち側で止まつてしまつて、十字架の下を本当にくぐつて聖霊の世界に入らないから、それではダメではないか」

ということですよ。



● 本性のまま

律法を破れば、割礼は無割礼と同じことでダメだと。聖別されると言ったって、本当の聖別は律法を守ることによって聖別なんだということです。神の民となるということは、

「汝はわが民なり。我は汝の神なり」

と。その保証として律法が与えられたんでしょ。その保証たる律法を守れば、即ち神の民であるということは、いわゆる一般の者から聖別されているということです。しかし、現実の人間は――あまり「聖」なんていう言葉を私は使いたくない。みんな罪びとだから――聖は信仰的現実としての聖でありまして、手放しの現実としての聖なんて人間にはない。信仰という現実としては、「聖とされる」「義とされる」ということです。手放しでは、

「義人なし、一人だになし。聖人なし、一人だになし」

ということ。いわゆる「聖人」なんて言ったって、あの「聖」というのは相対的な言葉だ。音楽の天才を「楽聖」と言ったり、詩人の天才を「詩聖」と言ったり、あんなのは言い過ぎだ。私はああいふ言葉は使わない。ゲートを「詩聖」と言ったり、少しおかしいよ。みだりに聖なんていう言葉を使わない方がいい。

26 割礼なき者も

即ち、異邦人も、

律法の義を守らば、その無割礼は割礼とせらるるにあらずや。

この場合の「律法の義」というのは、本当の意味で、律法という本当の神さまとの実存関係の現実を「義」と言ったわけだ。いわゆるパウロが別なところで言っている律法の義ではないですよ。律法の義というものは、外側から律法を守っているその義しさを、一般の言う律法の義と言うんです。この場合の「律法の義」というのはそうではなく、もっと深い意味で言っているわけです。ユダヤ人はとにかく、一生懸命で律法を守っていれば、それでもって義だと思っている。パウロもそう思っていた。そして、自分の義を誇つてみたり、律法を誇つてみたりした。それはキリストがダメだと言う。

27 本性のまま割礼なくして律法を全うする者は、

27節はおもしろい言葉です。即ち、お前たちは「律法、律法」なんて言っているけれども、異邦人でも本当に善良な異邦人がいるではないかと。「本性のまま」と、ここにも書いてあるでしょ。

「割礼なんていうものはやらない、そんなことは知らないで律法を全うする者が、そういう者がもしあるならば」

と。本当に善良な人はいますよ、相対的に言っただけ。それは、いわゆるクリスチャンよりかずつと立派な人がいる。

儀文と割礼とありてなお律法をやぶる汝を審かん。

逆に審くぞ、お前たちは審かれるぞと。「儀文」とは、文字上の律法のことを儀文という。



儀文という字は「グランマ」という字です。文法みたいな。書かれたところの外側の律法のことを儀文、グランマと言う。もともと「書かれたるもの」という意味だ。

28 うわべそれ表面のユダヤ人は

即ち、形式だけで、血統の上でのユダヤ人は、

ユダヤ人たるにあらず、

「俺はアブラハムの子孫である」と、ユダヤ人であると思っている。そういうのは「表面のユダヤ人」という。表面のアブラハムの子孫です。血統を誇るな。血筋がどうだなんていうことではないと。

「各時代は神に直結する」

とランケは言いましたが、各人は神に直結する。「親父さんが信仰があつたから、だから私も大丈夫だ」なんて、とんでもない。一人びとりが神との直結であつて横のつながりではない。「親父が学者だから、私も学者だ」と思うのと同じことです。勉強しなければ、学者になれない。それと同じことです。

肉に在る表面の割礼は割礼たるにあらず、

いわゆる宗教儀式としての割礼が割礼でも何でもない。むしろ、割礼否定だよ。もうこれはエレミヤが、

「神殿、神殿と言つて、神殿をエラク言っているが、本当の神殿の礼拝をしてなければ、何が神殿だ」

と言つて攻撃している。あれと同じことです。「教会、教会と言つたつてダメではないか」というのと同じこと。また、「無教会、無教会」と言つて、形式のないことをただ誇つていたつて、それもダメなんです。問題は、どういう相対的現れ方だろうと、

「そこに本ものが来ているか」

ということ。だから、宗派根性はダメです。要するに、党派根性はすべてダメです。

●それが本ものであるかどうかだけ

仏教でもそうだよ。天台、真言、浄土、浄土真宗。日蓮。道元の禅宗。いろいろある。どれも結構です。これではいけないということはない。どれも結構です。ただ問題は、本当に結構であるためには、

「その中に本当に仏が生きているか、如来が来ているか」

ということだけです。「南無妙法蓮華経」でも「南無阿弥陀仏」でもいい。「それが本ものであるかどうか」だけが問題です。「南無妙法蓮華経でなければならぬ」とか、「南無阿弥陀仏でなければならぬ」とか言つて、他宗を排撃したらダメだということ。分かりますね。

太陽の光みたいなんだよ。光も空気も無色。無色のところに無限色が入っている。それが花に入ると、これは黄色になったり、赤色になったりする。けれども、黄色も赤も元



は無色なんだ。無色の太陽の光から来ている。赤も本当の花である。黄色も本当の花である。これは本ものだから、いいんです。「お前はカーネーションでなければならない。お前は水仙でなければならない」なんて、お互いに言ってやしない。かすみ草でもみんなそうです。それでこれは調和しているわけですよ。

国の在り方だって、みんなそうです。いろいろなイデオロギーがあるさ。みんな、それぞれやっていればいい。イズムでもって人をイズム化しようとしてやってみたい、しょうがないね、この人間というのは。

それは結局何かと言うと、自我なんです。自我、エゴイズム。要するに、全ての問題の元はエゴイズムです。エゴイズムが罪なんです。問題は、割礼するとかしないとか、そんなことではない。「律法を守れば」とパウロは言っている。守れば結構だが、「守れば」だって、本当は守れない。そのことを彼はよく知ってしまった。守ったような顔をしているけれども、実は本当に守っているのではなかったと。

それをルターが、

「心の奥底からこれに従う」

と言った。いかに律法に即するか。心の奥底から律法に即することが出来る人は、それは本当の義人だけれども、残念ながらそれはいない。ルター自身がそれに苦しんだ。一生懸命で心の奥底から従おうとしたが、外側からは立派で模範僧なんだけれども、模範僧と言われれば言われるほど彼は苦しんだ。

「実は私は本当の心の奥底から喜んで守っているのではない。自分と戦いながらやっていくんだ」

と。戦うことは道徳的には結構なことなんです。けれどもそれは、まだ本当の世界ではない。「克己」と言うね。己に克つ。己にかつということを一生懸命でやるのは、これは道徳の世界です。「すべし、すべからず」で、しょっちゅうやっている。中学や高等学校で先生方が言っているのは、みんな、その自己との戦いのことを言っている。「そんなことをしてはダメではないか。よく反省しろ」なんてなわけです。あるところまでは、それでいきますよ。けれども、本当のところには来ない。本当のところは、絶対的な世界に入らなければダメだということです。

●隠なるユダヤ人

その29節が大事なんです。

29 隠なるユダヤ人はユダヤ人なり、儀文によらず、霊による心の割礼は割礼なり、その誉は人よりにあらず神より来るなり。

こういう句はしっかり覚えておいてもらわなくては。これはなにもユダヤ人に限らない。「隠なるユダヤ人」とは――上辺の、形の、血統の、そういうユダヤ人はダメです――この



「隠^{ひそか}なるユダヤ人」は「内なるユダヤ人」と言ってもいい。心の、外側に現れない奥の世界、内の世界をこの「隠^{ひそか}」と言った。「陰に陽に」と言うけれども、この「隠」はあの陰陽の陰ではない。内なる、内密の、奥なる、内奥のユダヤ人ということ。即ち、神の声を聴き、神の言を受けとっている者。神の律法は、「隠^{ひそか}なる律法」というのは「霊」なんです。律法は霊です、霊的なんです。「ガイスト」の世界。「心、心」と言っているけれども、本当は霊なんです。「プニューマ」です。そういう内なる、奥なるユダヤ人は本当のユダヤ人である。神さまの霊言を聴いて、霊法を本当に心の奥に受けとっている者、魂において受けとっている者。それが本当のユダヤ人である。

それはいわゆるユダヤ人に限らない。ギリシヤ人であろうと、日本人であろうと、蒙古人であろうと、何だつて構わない。世界中のどういう民であろうとも、神の言を本当に受けとった者は、これが「隠^{ひそか}なるユダヤ人」です。これが神の選民である、神の民である。「ユダヤ人なり」ということは、言葉の一番深い意味において、「神の民なり」ということです。隠なるユダヤ人が神の民である。

儀文によらず、霊による心の割礼は割礼なり、

「儀文」によらず、「グランマー」ではないと。「霊による心の割礼」、人間の一番深いところをここでは「心」と言っているが、本当は「霊」なんです。神の霊によるところの心の割礼は割礼である。「肉体的にどうしたこうした」と、そんなことではない。即ち、自分の心が破れていること。いわゆる心が破れて、割礼を受けている。そして、神の霊がそこに入っている。「破れ・砕け」と私が言うでしょ。心が砕けている。そこには本当の神の霊が来る。申命記10章16節を見てください。これは大事なところですよ。申命記というのは律法の世界で大事なところだから、申命記は読んでおかなければいかん。申命記は「愛の律法」と言われている。15節から、

「¹⁵然るにエホバただ汝の先祖等^{たち}を悦びて之を愛し、その後の子孫たる汝らを万^{よろず}の民の中より選びたまえり。今日のごとし。

神さまの愛は一方的な愛で、それで選んだ。それで今日のお前たちのようなわけだ。

¹⁶然れば汝ら心に割礼を行え、重ねて項^{うなじ}を強く^{なか}する勿^なれ。」(申命記10・15・16)

「心に割礼を行え」とちゃんと旧約で書いてある。パウロが言うよりか先に、ちゃんと旧約で言っている。肉体の割礼なんて問題ではない。心を破れという。

「神さまから生まれつきの自我心を破ってもらえ。心に割礼を行え。自我心を、エ

ゴイズムを砕かれよ」

というわけだ。エゴイズムはなかなか自分では砕けない。一時は砕けたような顔をするけれども。だから、エゴが破れなくてはいかん。

「心に割礼を行え」

とは大事な言葉ですね。エレミヤも言っている。エレミヤ記4章4節、



「4 ユダの人々とエルサレムに住める者よ、汝等みずから割礼をおこないてエホバに属^つき、おのれの心の前の皮を去れ、

「心の前の皮」です。これは肉体的な男性の陽の皮ではない。
然^{しか}らざれば汝等の悪^{あしき}行^{おこない}のためわが怒^{いかり}、火の如くに発して燃えん。これを滅^けすものなかるべし。」(エレミヤ4・4)

「神の審判が来るぞ、心の割礼をやつてないではないか」
と。エレミヤも神さまの怒りを怒りとして怒ってしまった。

●霊による心の割礼

コロサイ書2章8節から、

「8 なんじら心すべし、恐らくはキリストに従わずして人の言い伝えと世の小学とに従い、人を惑わす虚^{むな}しき哲学をもて汝らを奪い去る者あらん。9 それ神の満ち足れる徳はことごとく形態^{かたち}をなしてキリストに宿れり。

キリストは「プレローマ」「全き」である。

10 汝らは彼に在りて満ち足れるなり。

キリストに在ると、キリストと一緒に在っていると本当に満ち足りている。

彼は凡^{すべ}ての政治と権威との首^{かしら}なり。11 汝らまた彼に在りて手をもて為^せざる割礼を受けたり、

「手をもてせざる割礼」とは、ユダヤ的な割礼ではないんだと。

11 即ち肉の体^{からだ}を脱ぎ去るものにして、キリストの割礼なり。」(コロサイ2・8)

「肉の体を脱ぎ去る」というのは、禪宗で言う「身心脱落」にちょうど当たる。生まれつきの自分の体たる心に執着しているのを我執と言う。それから脱落している。生まれつきのものは持つてますよ。けれども、そんなものはや問題でない。そんなものに支配されないという境地が、この身心脱落というわけです。「肉の体を脱ぎ去るものにして」というのは、そういうことです。

「キリストの割礼なり」とは、キリストの割礼を受けると、即ちキリストによつて自我が破られたわけです。十字架で自我が破られ、自我が裂かれてしまった。

「我れキリストと共に十字架せられたり」

とパウロが言った。これが「キリストの割礼」です。ユダヤ的に言うと、十字架は正に、贖罪はキリストの割礼なんです。それだから、生まれつきの我というものに、身心に支配されない。正に身心脱落はキリストの十字架によるところの恩寵の現実です。生まの現実ではない。恩寵の現実だよ、人間は相変わらずダメなんだから。ダメなことを、いつも自分を、そのダメさ加減をただ問題としていたら、だんだん反ってダメになる。ダメでない



ものを問題にして行かなくては。ということは、キリストを問題としていく。自己中心からキリスト中心に変わっていかなくては。中心をキリストに置いていく。キリスト中心で、自己中心ではない。キリストをセンターとします。キリスト中心で動く。こまの心棒はキリストなんです。自分ではない。それがこの「キリストの割礼」、十字架です。十字架で抜けると、今度はキリスト中心に動く動力は聖霊であります。

それを無教会は「十字架、十字架」と言つて、動力の聖霊を受けないではないか。だから、無教会はダメではないか。「信仰によつてのみ義とされる」と言つて、「信仰、信仰」と言つて、自分の信仰が私されているではないか。何が「信仰」か。キリストを受けとることの他に信仰なんてものがあるんですか。

皆さん、しっかりしてくださいよ。「罪とは何か」なんて古い問題を出しているけれども、これはいつも新しい問題です。

どうして、この集会をお休みになるかね。私は、集会は本当に大事だと思っている。私は形式でやってない。毎回、前進して行くんですから。本当は、九州のはてからでも来てもらいたいんだ。仕方がないから、録音しているけれども。「録音があるから、集会へ行かなくてもいい」なんて思ったら、とんでもない間違いだ。何と言つても、生きたこの魂の、肉声のこの現実、録音ではまだ響きがこない。録音だけでは足りないから、ビデオもやってください、大変ご苦労さんで、ありがたいですけれども。また、「録音だのビデオがあるからいい」なんて思ったら、とんでもない間違いだ。そのうちに、私は地上にいないから、西君が一生懸命でやっつけてくれるのだけれども。

私みたいな破れ器を通して本当のものが現れるから仕方がないと言っているだけの話です。破れ器というのは、「破れ」というのは割礼を受けている。今度は逆に、その破れこそ大事なんです。キリストに十字架で破られ、砕かれていなければ、本当の「円現」は来ない。頭の理屈や思想ではないですよ。いいですね。

●十字架と聖霊

「隠^{ひそ}なるユダヤ人はユダヤ人なり。内なるユダヤ人、奥なるユダヤ人はユダヤ人なり。儀文によらず、霊によるところの、神の霊によるところの、キリストの霊によるところの、心の割礼が本当の割礼だ」

と。これは十字架を指すから、間違えないでくださいよ。形容で言っているのではない。この「霊による割礼」の中には、十字架と聖霊の両方とも入っています。

「これは人^{ひと}よりにあらず、神より来る^{きた}なり」

正にその通り。神・キリストから来たものである。

洗礼、聖餐という。この洗礼の方は聖霊の洗礼です。聖餐ならば、本当にキリストの霊をいただく。十字架を受ける洗礼、罪の贖いの洗礼。それから、聖餐は、「わが血、わが



肉なり」というキリストの霊を受けとること。だから、「洗礼と聖餐」は、「十字架と聖霊」なんです。その意味においては、洗礼と聖餐は非常に大事です。形式ではだめだけれども。水のバプテスマではない。十字架におけるところの霊のバプテスマを受ける。同時にそれは両方にあると言ってもいいけれども、特に分ければ、洗礼と聖餐は十字架と聖霊なんです。

●神の誠実

ロマ書3章に入ります。

¹ 然らばユダヤ人に何の優る所ありや、また割礼に何の益ありや。

ダメではないかと、生まれつきのそんなものは。まだ形式的なそんなものはダメだと。

² 凡ての事に益おとし、先ず第一に彼らは神の言を委ねられたり。

律法で委ねられた。

³ されど如何ん、ここに信ぜざる者ありとも、その不信は神の真実を廃つべきか。

彼は妙な論理の言い方をしている。心から神さまを信じていない者はユダヤ人にもたくさんいる。そのために神さまの真実が破られたら——即ち、神さまの真理というのは、

「われは汝の神、汝はわが民なり」

という約束です。それが「神の真実」の具体的内容です——それが破棄されるのか。そうではないだろうと。「決して然らず」と言っている。

⁴ 決して然らず、人をみな虚偽者とすとも神を誠実とすべし。

神さまの言は成就する。それを「真実」と言う。成就しない言を真実とは言わない。人間の方は、言っても本当にそれを守らなかつたり、しなかつたり、たくさんしている。それは「虚偽」と言う。その言葉自身は間違いではないよ。けれども、それが実現しない。言と行が一つになっていない。それは虚偽と言う。神のことは言と行が一如になっている。「如」というのは「如し」という意味ではない。「そのようにして現実には、その現実がそうである」というのが「如」という字で、妙な字だね。「真如」とか。

「一」という現実である」

ということが「一如」という意味です。

神さまは言行一如である。ということは、言と行の奥が一つ。一つの奥から発しているから、それが言ともなり、行ともなる。言と行とをつじつま合わせようとしたって、これは合わない。人間はその奥から本当に発している言と、本当に発している行なら一つなんです。ところが、残念ながら、これがなかなかできない。というのは、自我というやつが働くから。エゴというやつが働く。

録して『なんじは其の言にて義とせられ審かるとき勝ちを得給わん為なり』
とあるが如し。



これは詩篇51篇の言葉です。「なんじ」というのは神さまのことです。

5 然れど若し我らの不義は神の義を顕すとせば

即ち、自分たちが如何に神さまに対して不義であるかということが、律法を守っていない、信じていないということが、逆に神さまの義が如何に素晴らしいかということを顕すとするならば、

何と言わんか、怒りを加えたもう神は不義なるか

「顕れるならいいではないか。それなのに、なぜ神さまは怒るか。怒る必要はないではないか。神さまの義が顕れればそれでいいではないか」

なんて言つて、「神さまを不義とするか」という、妙な論理です。

(こは人の言うごとく言うなり)

と。正に、パウロはそういう論法ではダメだと言っている。

6 決して然らず、若し然あらば如何にして世を審き給うべき。

審きようがないではないかと。

7 わが虚偽によりて神の誠実いよいよ顕れ、その栄光とならんには、争で我

なお罪人として審かるる事あらん。

「それならいいではないか。神さまの栄光が現れるなら、結構ではないか」と、そんなばかなことを言うやつがあるかと。

8 また『善を来らせん為に悪をなすは可からずや』

なんていうようなことを言うような、そんな論理があるかと言つて、パウロはバカげた論理をここに持つて来ているんですよ。彼自身の言葉ではない。

(或者われらを譏りて之を我らの言なりという)

「われら」というのは、「パウロたち」のこと。とんでもない。そんなことは言つた覚えはないぞ。福音がすっかり誤解されていると。

斯る人の罪に定めらるるは正し。

そんなやつらはどうせ審かれるぞと。

9 さらに如何ん、我らの勝る所ありや、有ることなし。

それでは、私たちは勝っているかというのと、どっこい、そうもいかんと。

我ら既にユダヤ人もギリシヤ人もみな罪の下に在りと告げたり。

もう、どこの国民であるとか、民族であるとか、そんなことは関係ない。全部、罪の下にある。全部、サタンの配下にある。全部、エゴイズムである。全部、自己中心である。全部、我執者である。

●キリストの無者

自己中心で動いているのを、これを「罪」という。



「汝の聖意みこころを成させ給え」

という祈りが即ち、神中心な祈りです。

「神の意志が成つてください。私の意志ではありません」

と言って、自己中心を否定しているんです、キリストは。

「私の心、私の我執、私の願いではありません。あなたの本願ほんがんが成つてください」

と。本願を受けとつていかなくは。そうすると、本願を受けとつて、自分を何ものともしないから、自己中心からはずれた者を「無者」と言う。私はキリストの無者むじやなんです。キリスト中心であるから。あなた方もキリストの無者であつてくださいよ。信仰の現実というのはそうなんだから。

神中心、キリスト中心でないのを「罪」と言う。罪とは何ぞや。「この間違つた行い、この間違つた行為」、そんなものは罪の枝葉に過ぎない。そんなものは罪ではない。罪として問題にしているのは、

「神中心であるか、自己中心であるか」ということです。

ところが、人間というのはくだらないんだ。「あの人がこんなことを言つた、こんなことをした」と、そんなことをしよつちゅう問題にしている。バカみたいなもんだよ。どうだつていいじゃないか、そんなことは。問題は、

「自分が本当に神中心に生きているか」

だけが問題です。そしたら、そこから光が発するから。お互いに「どうのこうの」と言い合つたつて、だんだんそれはお互いにダメになつていくだけの話です。

本当に万人は宗教を要します。まあ、この集会に来ている青年諸君は、将来、大きな課題を持つているよ。まっしぐらに、それと取っ組んでやつてください。霊の医者になつてもらいたい。肉の医者とはたくさんいるけれども、霊の医者には。

みんなそれぞれ、与えられた自分の天賦に――そこに天職ありという――まっしぐらに行けということ。高校を中退して、バイオリン製作のマイスターシャフトを得た人がいる。何であろうといいんです、なにも大学へ行かなくなつたつて。大学に行ったことにケチつけるのも何でもない。とにかく、日本人は「何を本当に評価するか」ということから全くズレてしまつて、「ワッショイ、ワッショイ」と、何でもかんでも、「大学卒」なんてくだらないことを言っている。私はそんなものは塵芥ちりあくたのごとく思っている。この無者に徹してください。そうしたら、無限無量者になるから。この世の大学もヘタクレもない。そういった人になつてください。もの凄くなつてきますから。自分でも驚くほどになつてきます。私は自分で正直、自分に驚いているんだから。「自分」というのはこの自分ではないよ、神さまのなさる「自分」です。



●無者

みんな罪の下にある。万人は罪人である。「あらゆる人々はこれ罪びとなり」という。

録^{しる}して『義人なし、一人だになし、

ハッキリしている。

11 聡^{さと}き者なく、神を求むる者なし。12 みんな迷いて相共に空しくなれり、善をなす者なし、一人だになし。

詩篇14篇の言葉です。もう詩篇でもって、旧約の世界でちゃんとこのことを宣言している。新約でものを言うのと、これはみんな生きてしまっただ。詩篇14篇1節から、

「愚かなるものは

「愚か」というのは、神さまを本当に受けとらない者を「愚か」と言っている。

心のうちに神なしと言えり。かれらは腐^{くさ}れたり。かれらは憎^むむべき事をなせり。

善を行う者なし。2 エホバ天より人の子をのぞみみて悟るもの神をたずねる者ありやと見たまいしに、3 みな逆^{そむ}きいでてことごとく腐^{くさ}れたり。善を行う者なし一人だになし。」(詩篇14・1～3)

パウロはこれをハッキリ福音の角度から捉^{つか}まえて言った。「でも、善をしてる者もあるではないか」なんて。相対的には善はやってますよ。けれども、これはみんな絶対的な質から、パウロは言っている。キリストすらも、

「なぜ、私を善いと言うか。善きものは神さまの他にない」

と。誰だろう、イエス・キリストが言っているではないですか。「私は善いと誰が言えるか」と。ああいうキリストの言葉を本当に捉^{つか}まえないから、牧師さんたちはキリストが本当に読めないんだよ。私はそれだから無者と言った。無善者。善無き者。だから、絶対的な善が彼の中に入って来たんです。もう、ハッキリしている。こんなハッキリしているものはない。みんな全然ダメなんだ。降参しないからいかん。キリストに、

「参りました!」

と言って、福音書に入ってこないから。福音書にぶつかって、「これは参りました!」と言わないから、本当の現実には入れない。「そういうことがあるだろうか? 私にもできるだろうか?」なんののかのと、何を言っているんだ。自分の側を何だと思っているのか。いいですね。その気合を本当に受けとったら、凄いことになる。凄いことになると言っているのに、無限無量のものをキリストは与えようとしているのに、「それは要りません」とやっているんだから、もつたいたくなくてしょうがない。

●聖霊における一如の世界

二、三日前に私立高等学校の支部の会合があった。ある校長さんが、「どうも左の手がおかしくて動かない」と言うから、「そうですか、あなた今ちよつとじつとしていなさい」と、



私は手を置いて15秒くらい祈って、「はいっ、治りました」と。手が治ったその人はもうびつくりしてしまつて、「どうしたんですか」と。「いや、私の中には神の力が働くんですよ」と。私は言葉では何も言わん。けれども、祈るとキリストがグツとくるから、もうそれは働く。「既に癒えたり」というのと同じことです。その人は本当におつたまげていたよ。

私が「一如」と言っているでしょ。キリストと本当に一つになってください。そのためには、キリストの前にぶつつぶれていなければダメです。「自分が少し霊的になった」なんて、とんでもない。私は「霊の貧しき者」なんです。何も無いですから。そうしたら、キリストは働きたもう。いわゆる霊的人物なんていうことを私は評価しているのではない。本当の霊的というのは、キリストのあの在り方です。

皆さん、本当にそれを——試すのではない——本当に自分がその境地になつていれば、キリストは為したもう。「キリストは為したもう」とか、「キリストに託する」と言いましても、その全托ということが聖霊における一如の世界に入らなければダメです。グーッと来てなければ。ただお願いの祈りではダメなんです。お願いが内側に来て、本願が働くところに来ないと。それを一如というんです。

いろいろなことにでつくわしても、絶対にうろたえることがない。私も70歳を超えてから、やっとそんなところに入つたので、遅まきながらでございますので、あなた方は20代からそんな世界を今、受けとらされて、本当はもう大変なことなんだ。

●神の前にぶつつぶれろ

パウロは詩篇14篇を引用しながらハッキリ、自分の言葉にして、ダメではないかと言っている。

13 彼らの咽は開きたる墓なり、舌には詭計あり、口唇のうちには蝮の毒あり、
14 その口は詛と苦とに満つ。15 その足は血を流すに速し、16 破壊と艱難とそ
の道にあり、17 彼ら平和の道を知らず。

彼らは平安の道を知らずということ。「平和」はむしろ「平安」です。

18 その眼前に神をおそるる畏なし』とあるが如し。

これは詩篇36篇の言葉です。「畏れ」とは、怖がることではない。「平伏し」と言ったらいい。本当に平伏してぶつつぶれることです。簡単に言えば、

「神の前にぶつつぶれろ」

ということですよ。

19 それ律法の言うところは律法の下にある者に語ると我らは知る、

旧約聖書における律法は律法の下にある者に、即ちユダヤ人に語っていると我らは知る。

これは凡ての口ふさがり、神の審判に全世界の服せん為なり。

神の審判に全世界の服せんために。「義人なし、一人だになし」だから。



20 律法の行為^{おこない}によりては、一人だに神のまえに義とせられず、ハッキリ言ってきた。律法の行為では、律法をどんなに行ってみても、誰も神の前に義とされない。このことをさんざん体験したのが、このパウロとルターです。

律法によりて罪は知らるるなり。

やろうと思えば、やろうとすればするほど、逆にまた律法は罪を刺激する。「すべし、すべからず」と言う、その反対の衝動が人間の中にある。自己中心だからね。

マルチン・ルターが『ローマ書の序文』の中で罪のことを言っています。それから、ルターの「罪惡観念」のことについては、佐藤繁彦氏の『ロマ書の根本思想』という本があつて、その第二部のところに非常によく書いてありますから、若い人は読むといい。私は大学時代にこれを読んで、いや本当の神学というのは何と素晴らしいなと思った。無教会で神学をけなしているが、とんでもないと思った。佐藤先生はもうこの一卷を世に残しただけでも、彼は地上における使命を果たしたと言つても過言ではない。これは博士論文ですけれども、要するに、

「罪というのは身体の外側のわざを言っているのではない。これは内側でもって、いろいろな力と一緒に働いているところの自己中心の在り方が、それが罪なんだ。即ち、全人間が、どんなにそれが精神的に見えようとも、全人間がそれ自身において、

私の言葉でいうと、自己中心に動いているときに、

それが罪だ。聖書は心の奥底を見ている

「心腸を見給う神よ」とエレミヤも言いましたが、

ということこそ聖書は語っている。心の奥底で神さまを受けとらない不信が罪である。」

という。「不信」ということは、「神さまを受けとらない、神を中心としない」ということが不信ということです。

●自愛は最大の罪

もう一つ別な言葉で言うと、自己中心ということは自愛^{じあい}ということですよ。己を愛していることです。

「自愛は最大の罪である」

と、西郷南洲も言った。キリストも、

「己を憎む者でないなら、わが弟子となることができない」

と言った。生まれつきの人間はこれができないんです。キリストは不可能を要求している。律法を為^する力がないのではない。力はどこかにある。その力は自己を愛するという力になっている。自己を愛するという力が一番強いものだから、自己中心の力が一番強いものだから、それで律法を愛することができない。神を愛すること、キリストを愛することができない。人間にはみんな、力はあるんですよ。けれども、これが自愛という力になっている。



みんな、自己中心の力になっている。我欲というやつ、我執ということになる。我執という力はみんなもの凄く持っている。これは強いんだ。消すことはできない。これは力だよ、我執というやつは。我執という力がある。この我執という力が、ただ抜けるのではなくて、別な力に変わらなくてはいいかん。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、主たる汝の神を愛すべし」

という、申命記のあの言葉、キリストのあの言葉。「愛すべし」なんて言われたって、愛することはできないんですよ、正直。自愛は自然性でしょ。自然性を罪と言うんだから、ずいぶん罪な話だよな。賜つているところの自然性が自愛なんだよ、これは仕方がない。生まれつき、本能的なんだ。動物だってそうだ。自己生命の保存のためにいろんなことをやっている。動物界だって決して単なる調和ではない。弱肉強食だ。

●本願の愛

そういう本能的な力を持っている。本能という力はもの凄い。そいつを消せと言ったって無理なんだ。

「方向転換せよ」

ということですよ。それが「回心」ということなんだ。「メタノイア」というのは「心をめぐらす」ということ。回心は、この自己愛を切り換えてしまうところの力は、もの凄い力が来なければダメです。これが聖霊のバプテスマということなんだ。これにでつくわして、ぶつ倒されると、この力が働き出す。

なるほど、生まれつきの自愛もあるでしょうけれども、これが今度は上に働いて、キリストを、神を愛せざるを得ない。己を愛せざるを得なかったのが神・キリストを愛せざるを得ないという、この「ざるを得ない」というのが本ものの世界です。自愛も本ものなんです、正直みんな。我執というやつは本ものです。それを「罪」と言われるので仕方がない。神さまを抜きにしてしまうから。神に造られた我々は、神に帰るようにできている。

「凡てのものは神より出で、神によりて成り、神に帰するなり」

とパウロが言っている。

本願の愛が入って来ると、大慈大悲が入って来ると、そうすると今度は、キリストを愛せざるを得ない。この力はもの凄いから、人を愛せざるを得ない。人を愛せざるを得ないということは、人を救うということ、助けるということです。自分のうちに働くから、助けざるを得ない。

ある人が「手がおかしい」と言うから、「はいっ」と言っ、私が自然の天的衝動でもってその人に按手するでしょ。そうすると治ってしまう。これはざるを得ない世界なんです。私というこんなやつを通して、今まで幾人の人がそのようにして助けられたか分からない。

「心臓の手術をする」と言うから、私はその人の心臓の上に手を置いて祈ってやった。「まあ、



明日、医者へ行つてごらん」と。その人は明日、医者へ行ったら、お医者さんが「もう治つてしまったから手術はやめた」と言う。これはみんな上からの力が働く。

皆さんはできるんですよ。自分を何ものかとしているうちは、できませんよ。自分を投げ捨ててかからないと。勉強でも何でもそうです。この力でもってグングン進んで行く。何をしようとも、これで行くんです。ピアノは弾けるようになるし、算盤そろばんをはじけば樂にできるし。何であろうとも、聖霊をいただければ、いろいろなその人が持っている相対的な能力に絶対的な質が入ってくる。その御霊をいただかないで、「私の信仰はまだ弱いので、もう少し聖書を研究してから」なんて、何をぬかすかと。聖書研究会なんて、終いにくたびれてしまうよ。

楽しいでしょ、皆さん。だから、集会には来ざるを得ない。

それで、「霊による心の割礼」というところが、今日の一番のポイントのところですよ。これが十字架・聖霊の事態ですから。

「一人だに神の前に義とせられず」

と言って、今度はもの凄く積極的な世界がこの次のところです。ロマ書の中でも極めて大事なところです。

